みんなの童話

海

海の近くの小さな駅に着いた。おじいちゃん家に来るのは、気が進まなかったが、お母さんとおじいちゃんで決めていたから、しかたがなかった。お母さんは、六月から病気で入院している。

潮のかおりのする朝の風が、ほほをなぜた。

「わぁ、黒い」

駅にむかえに来たおじいちゃんは、きたえあげた漁師の風格があった。

「けん、部屋から海がみえるんだ。海岸も近いし、泳ぎの練習もできるぞ」

おじいちゃんは、ぼくが泳げないのを知っていた。

午後になると、

「浜に行くぞ」

と、おじいちゃんがぼくをさそった。

「足がうまって、うまく歩けないよ」

砂浜は、歩きにくかった。でもおじいちゃんは、すたすたと早く歩く。

波うちぎわについた。

「それじゃ、準備運動をするぞ」

一、二、三、四、おじいちゃん流の水泳体操。背中を伸ばしたり、手をふったり、おじいちゃんのまねをした。

腰までつかったあたりで、

「とにかく泳いでみろ」

と、おじいちゃんが言った。

ぼくは、水中の砂地をぽんとけって、体を伸ばした。海の水がすっぽり、体をつつんだ。

ゴボゴボゴボ、しずみそうになった時、おじいちゃんの手がぼくのお腹を支えた。

それから、毎日練習が続いた。

一週間たったころの夜だった。

「けん、海岸に行くぞ」

「おじいちゃん、どこに行くの」

「ついてくればわかる」

外は、空も海も昼間と色がちがって見えた。星がきらきらかがやいている。

「こんなに星を見たのは、初めてだ。きれいだなー」

波の音が聞える。

風の音も感じる。

「おじいちゃん、待ってぇ」

おじいちゃんの行き先は海辺だった。砂浜のおくの波の来ない所に歩いて行く。月が、やさしく砂浜をてらしていた。

「あそこに足あとがあるよ」

「海がめの足あとだ」

ぼくは、足あとの始まっている所をほってみた。

「中はあったかいよ。これ、みてみて」

ぼくは、ピンポン玉位の白いたまごを二つ、おじいちゃんに見せた。

「海がめのたまごだ。元にもどして砂かけとけよ」

「けん、かくれろ」

おじいちゃんとぼくは、岩かげにかくれた。黒い小岩のような海がめが、砂浜に上がって来た。百キロもありそうな海がめが、注意ぶかくあたりを見まわしている。

波のこない所で、バサッバサッと前足で砂をとばして、体がかくれるくらいのあなをほっている。体がすっぽりかくれると、全身に力を入れて、

「フゥーッ、フゥーッ、フゥーッ」

大きく息をはくたびに、頭を上げて、苦しそうに息をしている。

「何をしているの？」

「たまごを産んでいるんだよ。黒潮にのって、長い長い旅をして、ここに帰って来たんだ」

月明かりにてらされて、海がめの目から、スーッとひとすじしずくが流れた。なみだのように見えた。

「たまご全部かえるといいな」

産み終えると、母がめは二度と会えない子がめのために、砂をかけ、ふみかためた。

「ほかの動物に食べられないように、よくふみかためるんだ」

母がめは、つかれた体をひきずるようにして、砂浜に足あとをのこしながら、海にもどって行った。

ぼくの目になみだがうかんでいる。おじいちゃんに見つからないように、そっと、そとでぬぐった。

夏休みの終る前に、たまごがふかして、子がめになった。母がめは、もうこの海岸にはいない。

「元気で大きくなるんだよ。そして、この海にもどるんだぞ」

ぼくは真っ黒になり、泳げるようになった。そして、少したくましくなって、お母さんの病院にむかった。

しろやま会員　木村久世